

# フリードマンのトランスミッション・メカニズムについて

吉 野 正 和

1. はじめに
2. フリードマンのトランスミッション・メカニズム
3. ブラック・ボックス
4. 望月昭一教授の見解
5. 清水啓典教授の見解
6. 土井省悟教授の見解
7. フリードマンの見解
8. むすびにかえて

## 1. はじめに

ケインジアン－マネタリスト論争においてトランスミッション・メカニズムの問題がある。これまで、トランスミッション・メカニズムはマネタリストの弱点であるとされていた。マネタリストのトランスミッション・メカニズムはブラック・ボックスである、といわれていた。この論文はフリードマンのトランスミッション・メカニズムを研究する。

## 2. フリードマンのトランスミッション・メカニズム

14年前に、筆者はフリードマンのトランスミッション・メカニズムを研究した<sup>1)</sup>。トランスミッション・メカニズムの説明に、フリードマンは、ほとんど、自信がないようである。フリードマンは以下のように述べている。

---

注1) 吉野[18]の67ページ以下。

「技術上の青写真というよりはむしろ印象的な表現に過ぎないものを与えよう大なまかで、ぼんやりした言葉を除けば、われわれはトランスミッション・メカニズムの知識に、ほとんど、自信がないのである」(フリードマン[8], [9] p. 222)。

しかし、自信がなくても、フリードマンはトランスミッション・メカニズムの説明をしなければならないのである。フリードマンは以下のように述べている。

「貨幣の変化と経済の変化との関係が、たとえ、どのように一貫していても、そして、貨幣の変化の自律性の証拠が、たとえ、どのように強かろうとも、もし、われわれが一方を他方に結び付けているメカニズムを、ある程度、詳細に具体化できないならば、貨幣的な変化が経済的な変化の源泉であるということ、われわれは納得しないであろう」(フリードマン[8], [9] p. 229)。

さて、フリードマンのトランスミッション・メカニズムの説明に入ろう。買いオペによって、増加した資金を獲得した人々は、まず最初に、確定利付きクーポンとリスクの低い証券を購入する。したがって、それらの証券価格が上昇する。人々は、他の証券(リスクの高い確定利付きクーポン証券や株式等)を購入するようになる。金融資産の価格が上昇するにつれて、人々は非金融資産を獲得するようになる。そこで、非金融資産の価格も上昇するようになる。このようにして、貨幣的刺激は、金融市場から財・サービス市場へと拡大されるのである。以上がフリードマンの説明である。しかし、ここで注意したいことは、フリードマンの場合、ポートフォリオの範囲が確定利付き債権や株式だけでなく、耐久消費財や衣類等の消費者在庫や人的資本等を含んでいる広い範囲の資産を含んでいて、したがって、その利回りも、広い範囲の資産の利回りであるということである。

### 3. ブラック・ボックス

ケインジアンは利子率と投資を使ってトランスミッション・メカニズムを説明している。貨幣量の増加は、利子率を低下させ、投資を増加させて、乗数倍の所得を生み出すのである。ケインジアンのトランスミッション・メカニズムの説明は、利子率と投資を使って、非常に、明白のようである。ケインジアンのトランスミッション・メカニズムの説明に対して、マネタリストのトランスミッション・メカニズムの説明は明白ではないのである。フリードマンの説明は、青写真でなく、印象的な表現に過ぎないし、大まかで、ぼんやりとした言葉に過ぎない。しかも、フリードマン自身は、トランスミッション・メカニズムの説明に自信がないとも述べている。フリードマンのトランスミッション・メカニズムの説明は、はっきりとしていない。したがって、フリードマンのトランスミッション・メカニズムの説明は「ブラック・ボックス」である、とケインジアンは、しばしば、批判しているのである。また、ケインジアンではなく、マネタリストであり、フリードマンの弟子である立教大学の西山千明教授も、フリードマンのトランスミッション・メカニズムの説明が不十分である、と考えている<sup>2)</sup>。したがって、フリードマン

---

2) 立教大学の西山千明教授は以下のように述べている。

「それに対して、フリードマンたちは、次のように考える。確かに金利が変動して、その結果お金という紙切れが実物経済の成長の仕方や大きさに影響を与えることがあることを否定はしない。また、ケインズ派の人たちがいうような流動性トラップという問題ではないけれども、金利に対して投資が敏感に動く場合もあれば、投資がほとんど変動しない場合もあるだろう。しかし、問題は、お金が実物経済に影響を与える経路はそれだけではないのだ、ということだ。お金は、もっと直接的にも影響を与える、というのだ。

このところがもっとも論議を呼ぶ点であり、理論的にもっともむずかしい点でもある。フリードマンは『直接的』ということの説明したくて、ヘリコプターからお金をばらまけばそのお金は経済に直接的に影響するはずだといったことがあるのだが、それに対してケインズ派や、そうでなくても金融資産選択理論の立場をとる人びとから、そんな非現実的な前提はないだろう。実際には金融資産と

(次頁脚注へ続く)

のトランスミッション・メカニズムの説明が不十分であるのは紛れもない事実のようである。

#### 4. 望月昭一教授の見解

ケインジアン－マネタリスト論争においてトランスミッション・メカニズムはマネタリストの弱点であり、「ブラック・ボックス」である、といわれている。しかし、昭和55年に、早稲田大学の望月昭一教授は、フリードマンのトランスミッション・メカニズムを、かなり、弁護している。望月教授は以下のように述べている。

「他方、アグリゲイティヴな全体の関係のみが研究されるならば、作用メカニズムに関する解釈の問題が残るであろう。だれでも実際に『ブラック・ボックス』で満足するものはいない。マネタリズムはもっぱら貨幣の動きと一定の支出の流れとの間に相関関係を確定したが、トランスミッション・メカニズムについてはいかなる説明も提示していないという趣旨でときおり強烈に批判されている。たとえば、ジョーン・ロビンソン (Joan Robinson) はつぎのようにのべている。

……しかし、シカゴにおける伝統は、数量方程式を左から右によむのであって、観察された関係は、相関を因果関係とみなすような場

---

の交換という形以外に通貨が発行されることはないのだ。それだというのに、こんな非現実的な前提を立てるから、フリードマンの通貨理論はおかしいのだ、と批判された。

たしかに、フリードマン自身も、お金がどういう形で『直接的』に影響を与えらるかという理論的分析に十分成功したとは、私も思わない。もちろん、彼も貨幣理論の分野において、きわめて理論的な貢献をしているし、いろいろな問題に関して彼が討論に参加するときは、彼こそすぐれて理論的な分析をすることで知られている。しかし、貨幣論における彼の貢献の最大の特徴は、むしろ実証的分析のほうにあったといわなければならない」(西山[15] 8ページ以下)。

合を除いては、なんの仮説をもたてることなく解釈されている。

フリードマンの思想には、超自然的な、神秘的な要素がある。かれによれば、貨幣ストックが存在しさえすればとにかく支出をふやす効果をもつのである。

しかしながら、フリードマンは貨幣的刺激が拡大していく姿をくりかえしくりかえし言葉の形でのべ、したがって伝導経路の数式によらないモデルを論じている。これに関し、マネタリストは無理論で議論したり、支出に対する貨幣量の神秘にみちた直接的な効果で議論するといわれているが、かかる見解は根拠のないものである。このことは、貨幣的影響について『いかに』とか『なぜ』という疑問が不必要だということではない。まったくその反対である。しかし、通常の均衡体系においてかかるトランスミッション・メカニズムがある程度適切に把握されるかどうかははじめからのべることはできない。

結局、理論的着想というのは、それが定式化されていたり、定式化されうるということだけですぐれているとはいえない。詳しく論述されているが誤っている観念よりも、輪郭が多少ぼやけていても正しい観念のほうがよいのは当然であろう。定式化というのはかならずしも現実をよく理解する助けとはならず、思考を誤った方向へむけるかもしれない」（望月 [14] 4 ページ以下）。

ケインジアン・トランスミッション・メカニズムは定式化されている。しかし、その定式化は誤っているかもしれないという趣旨で、望月教授は、フリードマンのトランスミッション・メカニズムを弁護し、ケインジアン・ブラック・ボックス批判を批判している。

## 5. 清水啓典教授の見解

昭和55年に、一橋大学の清水啓典教授も、望月昭一教授と同様に、フリードマンのトランスミッション・メカニズムを、かなり、弁護し、ケインジアンケインジアンのトランスミッション・メカニズムからのブラック・ボックス批判を批判している。清水教授は以下のように述べている。

「これに対してケインジアンケインジアンの側からは、この本質的な問題である貨幣部門と実物部門の関連、即ちトランスミッション・メカニズムを説明する体系化されたモデルがないという点が、ブラック・ボックスであるとして批判的となって来たことも又事実である。ところが、貨幣部門と実物部門の関連というだけであれば、既に指摘されているルート以外にも、更に又他のルートもあり得る可能性があるし、既に指摘されているルートについてだけでも、それらを統一的にモデル化することはかなり困難なことである。しかも、細部を詳細に規定したモデルを作るということ自体、貨幣部門と実物部門の関連をいくつかのルートに限定することを意味する。即ち、現在の段階では、統一的にモデル化することが難しいような様々なルートあるいはメカニズムを通じて、貨幣部門と実物部門が密接に対応しているということこそ、マネタリストの主張の本質とも言える点なのである。従って、それを立証するためには、いわゆる reduced model を用いた実証分析による外はないのである。もちろん、ブラック・ボックスと言われる部分についてより明らかにして行く努力は当然のことであるが、しかし、トランスミッション・メカニズムが統一的にモデル化されていないという理由だけで、マネタリストの主張を排除するという態度もまた、その本質を理解していないと言わなければならない。トランスミッション・メカニズムが明確でないという批判は、従来貨幣部門と実物部門の関連を、より狭い範囲でしかとらえていなかったケインジアンケインジアンに対しても、同様に妥当するのである」(清水[17]73ページ)。

表現方法は違うが、清水教授は、内容的には、望月教授と同じことを主張しているようである。

## 6. 土井省悟教授の見解

四国学院大学の土井省悟教授はトランスミッション・メカニズムについてもうひとつの見解を示している。土井教授は、ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムを、形式的に、一致させている。まず、ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムを考える。貨幣量の増加は利子率を下落させ、投資を増加させ、そして、乗数過程を通じて所得を増加させる。貨幣量の増加は、利子率を通じて、「間接的に」、所得に影響するのである。次に、マネタリストのトランスミッション・メカニズムを考える。貨幣量の増加は、金融資産の価格を上昇させ、債券利子率は下落する。ここまでは、ケインジアンと同じである。マネタリストのトランスミッション・メカニズムは、まだ、続きがある。貨幣量の増加は金融資産の価格だけでなく、非金融資産の価格を上昇させ、非金融資産の利子率を下落させる。非金融資産の価格の上昇はその生産を増加させる。同時に、生産諸資源と生産設備の増加も必要になる。生産諸資源の増加は賃金を引き上げ、生産設備の増加は、利子率の下落によって可能になる。このようにして、産出が増加するのである。ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムも、マネタリストのトランスミッション・メカニズムも、「利子率を経て経済に影響する」といえる。したがって、「形式的レベル」において、貨幣の作用経路は同じである。したがって、マネタリストに貨幣作用経路がないというブラック・ボックス批判はあたっていない。それでは、ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムの違いはどこにあるのか。それは、プロセスではなくて、資産の範囲の違いである。ケインジアンは、貨幣の代替資産として、債券を考えているのに対して、マネタリストは、貨幣の代替資産として、耐久財や不動産まで考えているのである。

以上が土井教授（[3]339ページ以下）の要約である<sup>3)</sup>。

## 7. フリードマンの見解

ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムについて、フリードマンは、どのように、考えているのだろうか。ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムについての相違は、プロセスの違いではなくて、資産の範囲の違いなのである、とフリードマンは考えてい

3) 土井教授は、別のところで、以下のように述べている。

「フリードマンのこのような作用経路は、貨幣供給量が直接、支出に影響するような論理に見るため、トランスミッション・メカニズムがブラック・ボックスになっているとの批判が生じる。しかし、これは、フリードマンとケインジアンそれぞれの利子率概念の違いであって、フリードマンの説明を利子率を通じて貨幣が経済に作用すると言いうることに何ら痛痒はない。フリードマンの利子率概念からすれば、あらゆる資産に利子率が存在するのであって、ケインジアンとフリードマンの違いは、考察の対象にする資産と利子率の範囲の違いである。ケインジアンが考察の対象にする資産は市場で取引される金融資産であり、市場で成立している利子率である。従って、フリードマンは貨幣作用経路を明示していないというのは正しくない」（土井[4]98ページ）。

「フリードマンによれば、利子率 (an interest rate) は、サービスの価格とそのサービスを生み出す源泉の価値との関係を示す純粋な数値であって、あらゆる資産にそれぞれの利子率が存在すると考える。したがって、フリードマンが、保有したいと望む実質貨幣量と現実に保有している実質貨幣量との差を、金融資産および非金融資産を購入することによってなくしてゆくと主張するとき、利子率を通じて作用するといえるわけである。したがってフリードマンとケインジアンとのちがいは、貨幣作用経路の性質のちがいはなく、考察される資産の範囲のちがいである。ケインジアンは、狭義の市場性のある資産と市場にあらわれた利子率に集中する傾向があるが、フリードマンはそのような資産と利子率のみならず、耐久消費財、半耐久消費財およびその他の実物財産（家族の将来の稼得能力の現在価値も含まれる）のような資産とそれに関連する利子率——その多くは暗黙裡であり (implicit)、観察できない (unobservable) ——をも考察する。その結果、フリードマンからみればケインジアンにとって強調される市場利子率は利子率の総スペクトルのわずかな部分にすぎないわけである」（土井[1]112ページ）。

「マネタリストは、ケインジアンよりも広い範囲の資産したがってより多くの利子率を考慮している。しかし、貨幣作用経路の性質については両者に違いはない。ともに、利子率変化ないし相対価格調整によって貨幣は経済に作用する、と考えている」（土井[2]31ページ）。



る。ケインジアンは、狭い範囲の資産の利率に、注意を集中する。それに対して、マネタリストは、一層広範な資産と利率に、注意を集中している。したがって、ケインジアンが強調する市場利率は妥当な諸利率の全スペクトルの中のほんの一部分にすぎない、とフリードマンは考えている<sup>4),5)</sup>。

4) フリードマンは以下のように述べている。

「マネタリストとケインジアンとの間のこの局面における相違は、この過程の本性についてのものではなく、その際に考慮される資産の範囲についてのものである。ケインジアンは、狭い範囲の市場性のある資産と記録される利率に注意を集中する傾向がある。マネタリストは、いっそう広範な資産と利率が考慮に入れられるべきであると主張する。マネタリストは、耐久消費財および準耐久消費財、建築物、および他の実物資産などの諸資産にも重要性を見出す。その結果、マネタリストは、ケインジアンが強調する市場利率は妥当な諸利率の全スペクトルの中のほんの一部分にすぎない、と考えるのである」(フリードマン[10]訳書219ページ)。

5) 四国学院大学の土井教授は、ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムの相違についてのフリードマンの考え方を、訳して、説明し、以下のように述べている。

しかしながら、ケインジアンとマネタリストの間にあるトランスミッションの違いは両者がとる価格に関する仮定の違いを反映するという点を指摘しておいてもよからう。

ケインジアンにとっては、ケインズの絶対的流動性選好状態が常態であると言うことを拒否することは利率を伸縮的にすることと同じである。価格は制度的に与件であるとするケインジアンにとって利率を伸縮的にすることは、価格の安定と言う仮定への「ひびわれ (clink)」であった。利率も一つの価格であるからだ。このひびわれは「利率」を狭く解釈することによって全面的崩壊をまぬがれた。同時に、市場制度がこの想定をたやすくうけいれさせた。結局、マネタリストがするように、「家具や家庭用品や衣服等々を別にして、家屋や自動車の販売価格やレンタル価格に暗黙にある『利率』(“interest rate” implicit in the sales and rental prices)を引き合いに出すのは、ほとんど通常ではない」(Friedman, 1987, pp. 13-14)。従ってこれらの価格は、いぜん制度的与件とみなされ続けたのであり、それがトランスミッション・プロセスを極端に狭いチャネルを通じて展開することを強制してしまったのである。つまり、利率を狭い範囲の資産に限定することによって価格が制度的与件であるとの仮定を維持していくことを可能にさせたのである。

したがって、数量理論へのケインジアンの挑戦として、フリードマンが整理した3つのうち2つ、①短期変動を考察する場合、価格を制度的与件として扱うのがよいとする点と②絶対的流動性選好状態とは相互代

(次頁脚注へ続く)

短期において、貨幣量の増加は、名目所得の増加を引き起こす、とフリードマンは、以前から、主張しつづけてきた。名目所得の増加は、産出の増加と物価の上昇に分割される。経験的に、産出の増加が先であり、後になって、物価が上昇するのである。それでは、この産出の増加と物価の上昇の比率は、どのようになるのであろうか。この産出と物価の分割の問題に関して、フリードマンは、以前から、苦心して、研究してきたのであるが、現在においても、よく判らないようである<sup>6)</sup>。この分割の問題は、トランスミッション・メカニズムと密接な関係があるが、未解決の問題となっている。この分割の問題は、おそらく、国により、時代により、様々なパターンがあるのであろう。しかし、ケインジアンも、この分割の問題について、なにも語るべきものをもっていない、とフリードマンは考えている<sup>7),8)</sup>。したがって、ケイン

替的命題とも考えられる。

一方、数量理論家の側には、価格を制度的与件とみなす、と言う禁止条項はなにもない。彼らは、価格を伸縮的とみなすので、「完全に」伸縮的ではないとしても、狭く定義された利子率よりも、広い範囲にわたる相対価格調整と言う言葉で、トランスミッション・メカニズムを解釈するのはごく自然である（土井[3]348ページ、Friedman [12] pp. 13-14）。

6) フリードマンは以下のように述べている。

「今日の経済理論のなかで、もっとも弱体で、もっとも不満足な部分は、諸条件の変化に対して経済全体が適応する過程、したがって集計的活動の短期的変動を取り扱う貨幣動学の分野であるように、私には思われる」（フリードマン[6] p. 42、ゴードン所収[13]訳書66ページ）。

「たとえば、貨幣需要は流通速度関数  $v(\cdot)$  の諸変数に関して完全に非弾力的であるというような、もっとも好都合な条件のもとでさえも、貨幣需要方程式(3) [本書の(7)式に類似の式] は、せいぜいのところ、貨幣所得の理論を提供するにすぎない。つまり、そのときには、この理論は、貨幣所得の変化は名目貨幣量の変化の映像であると述べる。しかし、この理論は、 $Y$  の変化のうち、どれだけが実質所得に反映され、どれだけが物価に反映されるかということについては、なにごとも語らない」（フリードマン[7] p. 15、ゴードン所収[13]訳書66ページ）。

7) フリードマンは3つの単純な理論を比較している（Gordon [13] 訳書62ページ以下）。ひとつ目は単純な数量説であり、2つ目は単純な所得一支出説であり、3つ目は単純な貨幣的名目所得理論である。そして、フリードマンは以下のように述べている。

「このモデルが他の二つのモデルと共有する主要な欠陥は、三者のうちどれも、  
(次頁脚注へ続く)

ジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムの相違は、プロセスではなくて、資産の範囲である、とフリードマンは考えていて、ケインジアンが主張しているブラック・ボックス論は妥当しない、とフリードマンは考えているのであろう。

## 8. むすびにかえて

前述したが、一橋大学の清水教授は以下のように述べている。

「もちろん、ブラック・ボックスと言われる部分についてより明らかにして行く努力は当然のことであるが、しかし、トランスミッション・メカニズムが統一的にモデル化されていないという理由だけで、マネタリストの主張

---

名目所得の変化が、短期において、物価の変化と産出高の変化に分割される割合を決定する諸要因——後出の第12節が取り扱う問題——については、なにも語るべきものをもっていないということである」（フリードマン、Gordon [13] 所収、訳書65ページ）。

8) 以上のフリードマンの見解を、四国学院大学の土井教授 [4] (131ページ以下) は説明しているが、他のところで、以下のように述べている。

貨幣の成長率の変化の影響は、最初、産出にあらわれるとしても、やがて物価の変化があらわれてくる。では貨幣成長の変化が、産出と物価の変化にどのような量的影響をうみだすのだろうか。

この点についての理論的な試みは、先の「理論的フレームワーク」に関する論文においてなされたが、なお試論的 (tentative) であり、未解決の問題である (Friedman [1970a] [1971], Gordon [1974])。この試論的な理論的説明に経験的内容を与えようとした経験的分析の結果も、不首尾であった (unsuccessful experiment) (Friedman & A. J. Schwartz [1982], p. 623)。したがって、貨幣成長の変化が産出の変化と物価の変化にどのような量的影響を与えるかということに対しての「経験的一般化」はない (Friedman [1987])。

.....

短期において貨幣成長率の変化が産出と物価の変化にどのような量的変化を生じさせるかを説明する理論はまだないというのが、実情であろうことは先にふれた。この点は貨幣数量理論的伝統にあるケインズの理論的伝統にあるが、等しく直面している理論的課題である (土井 [5] 130ページ以下)。

を排除するという態度もまた、その本質を理解していないと言わなければならない」（清水[17]73ページ）。

「ブラック・ボックスがあるのだから、フリードマンの理論を排除する」というケインジアン主張と、清水教授は、戦っていたようである。また、前述したが、早稲田大学の望月教授も以下のように述べている。

「結局、理論的着想というのは、それが定式化されていたり、定式化されるということだけですげているとはいえない。詳しく論述されているが誤っている観念よりも、輪郭が多少ぼやけていても正しい観念のほうがよいのは当然であろう。定式化というのはかならずしも現実をよく理解する助けとはならず、思考を誤った方向へむけるかもしれない」（望月[14]5ページ）。

望月教授も、表現方法こそ違いますが、清水教授と、内容的に、同じことを主張しているようである。やはり、それは、「ブラック・ボックスがあるのだから、フリードマンの理論を排除する」というケインジアンの主張と、望月教授も、戦っていたのであろう。清水教授と望月教授の見解は、非常に、優れた見解であり、フリードマンのトランスミッション・メカニズムのブラック・ボックス批判の批判をしているようである。

また、四国学院大学の土井教授は、フリードマンの見解に忠実であり、ブラック・ボックス批判は妥当ではない、と主張している。ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムの相違は、プロセスではなくて、資産の範囲の相違である。ケインジアンも、マネタリストも、「利子率を経て経済に影響する」ということである。したがって、トランスミッション・メカニズムは、「形式的レベル」では、同一であり、ケインジアンのブラック・ボックス批判は妥当しない、と土井教授は主張している。この土井教授の主張は、ケインジアンのブラック・ボックス批判を退けてしまっているのではないかと考えられる。

最後に、フリードマンについて述べよう。ケインジアンも、産出と物価の分割の問題について、なにも語るべきものをもっていない、とフリードマンは考えている。この分割の問題とトランスミッション・メカニズムは密接な関係がある。また、フリードマンは、ケインジアンとマネタリストのトランスミッション・メカニズムの相違は、プロセスではなくて、資産の範囲の違いである、と考えている。したがって、ケインジアンブラック・ボックス批判は妥当しない、とフリードマンも、考えているのであろう。

トランスミッション・メカニズムと産出と物価の分割の問題を、フリードマンは、以前から、研究し続けてきた。しかし、未だに、十分に、成功したとは言えないようである。トランスミッション・メカニズムと産出と物価の分割の問題は、フリードマンでさえも、フリードマンの能力の限界を超えているのかもしれない。

## 参 考 文 献

- [1] 土井省悟「M. フリードマンの貨幣作用経路について」『金融ジャーナル』第16巻第1号, 1975年1月号。
- [2] 土井省悟「貨幣と経済(2)——マネタリストの主張——」内橋吉朗編『金融の理論と実際』春秋社, 1984年。
- [3] 土井省悟「M. フリードマンの貨幣理論における利子率」『四国学院大学創立40周年記念論文集』1990年2月。
- [4] 土井省悟「M. フリードマンの貨幣理論と利子理論」四国学院大学『論集』第75号, 1990年12月。
- [5] 土井省悟「M. フリードマンの貨幣政策論——開題——」四国学院大学『論集』第85号, 1994年3月。
- [6] Friedman, M., *Essays in Positive Economics*, Chicago: The University of Chicago Press, 1953. 佐藤隆三・長谷川啓乏訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977年。
- [7] Friedman, M., "The Quantity Theory of Money—A Restatement", In *Studies in the Quantity Theory of Money*, ed. Friedman, M., Chicago: The University of Chicago Press, 1956. Reprinted in Friedman [9].
- [8] Friedman, M. and Schwartz, A. J., "Money and Business Cycles", *Review of Economics and Statistics*, February, 1963. Reprinted in Friedman [9].
- [9] Friedman, M., *The Optimum Quantity of Money and Other Essays*, Chicago: Aldine, 1969.

- [10] Friedman, M., *The Counter—Revolution in Monetary Theory*, The Institute of Economic Affairs, 1970. 保坂直達訳・解説『インフレーションと失業』, マグロウヒル好学社, 1978年。
- [11] Friedman, M., and Anna J. Schwartz, *Monetary Trends in the United States and the United Kingdom: Their Relation to Income, Prices, and Interest Rates, 1867-1975*, The University of Chicago Press, 1982.
- [12] Friedman, M., "Quantity Theory of Money", in *The New Palgrave: A Dictionary of Economics* (ed. by John Eatwell, M. Milgrate and P. Newman): Vol. 4, pp. 3-20, 1987.
- [13] Gordon, Robert ed., *Milton Friedman's Monetary Framework: A Debate with His Critics*, 1974. 加藤寛孝訳『フリードマンの貨幣理論——その展開と論争』, マグロウヒル好学社, 1978年。
- [14] 望月昭一「ケインジアンとマネタリストの方法について」早稲田大学『産業経営』第6号, 1980年12月。
- [15] 西山千明『マネタリズム——通貨と日本経済』東洋経済新報社, 1976年。
- [16] Robinson, J., *Economic Heresies*, 1971. 宇沢弘文訳『異端の経済学』日本経済新聞社, 1973年。
- [17] 清水啓典「マネタリスト論争と乗数理論」『一橋論叢』第83巻第6号, 1980年6月。
- [18] 吉野正和「フリードマンの貨幣供給理論について」早稲田大学『商経論集』第52号, 1987年3月。